

常用漢字考Ⅲ

矢 澤 秀 昭

はじめに

漢字は、形・音・義の三要素から成る。単音節言語である中国語は、その一音節を文字化している。つまり漢字一文字一文字に義（意味）があることになる¹⁾。

しかし、『康熙字典』（清の康熙帝の勅撰により、張玉書、陳廷敬らが、1716年に編纂、完成させた字典。収録文字数はおよそ49,000）には以下のような例がある。

箒 字彙補、義未詳、且縁切

『字彙補』は書名²⁾。「義未詳」は意味が未だ明らかでないこと。「且縁切」は反切³⁾であり読み方を表している。

𦉰 搜真玉鏡、義未詳、音若

『搜真玉鏡』は書名⁴⁾。「音若」は読み方が「若」と同じ（もしくは非常に近似）であることを表している。

𦉰 義未詳、竜龕音敏

『竜龕』は書名⁵⁾。「音敏」は読み方が「敏」と同じ（もしくは非常に近似）であることを表している。

この3例は漢字の形、音があり義が欠落している。

𦉰 字彙補、音未詳、商世国名見史記国名記

「音未詳」は読み方が未だ明らかでないこと。『史記』のなかの国名であ

る。

貼 字彙補、音未詳、鼠名

ネズミの一種であろう。

咄 字彙補、音未詳、倭国地名

日本の地名に用いられたものである。

この3例は漢字の形、義があり音が欠落している。

麴 揚雄蜀都賦、音義未詳

『揚雄蜀都賦』は書名⁶⁾。「音義未詳」は読み方も意味も未だ明らかでないこと。

この例は漢字の形だけが書物によって遺されたものである。

上記のような例から漢字は必ずしも形・音・義すべてが揃っているとは限らないのである。

常用漢字⁷⁾では義はどのように扱われているか。ここでは常用漢字表にある漢字の義（意味）について考察する。

常用漢字表の体裁

常用漢字表の「前書き」の1に「この表は、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すものである」と先ずある。現代日本の漢字使用の規範となることを謳っている。

「表の見方及び使い方」の2に「本表には字種2,136字を掲げ、字体、音訓、語例等を併せ示した」とあり、「本表」は漢字欄、音訓欄、例欄、備考欄で構成されている。字種とあるのは、例えば「悪（悪）」、「観（観）」、「従（従）」などその字の異体字を括弧内に示している場合もあるので、

2,136字とはせず2,136字種としている。音訓欄には音読を片仮名で、訓読を平仮名で示している。例欄には熟語、送りがなを含めた訓読を示している。備考欄には「愛媛県」や「岐阜県」などの地名に特化している読み方や、「竹刀（しない）」や「土産（みやげ）」などの熟字訓や当て字を示している。このような例はまた最後の「付表」にまとめて掲載されている。

排列順は、原則は音読の五十音順で同音の場合は画数の少ない方を先とする。「杵」、「枳」などの国字、「嵐」、「尻」、「姫」など音読を示していないものは訓読の五十音順に依っている⁸⁾。

常用漢字表は字体、読み方、例は示しているが積極的にその字の解説、意味については触れていない。字体については非常に細かく例を挙げている。

常用漢字の義（意味）

訓読は和語でありその字の意味を表していると考える。ここでは常用漢字表において訓読を示さない815字に関して以下のように分類した。

- 1 広辞苑⁹⁾に訓読があるもの。
 - 2 広辞苑に訓読は無く、漢字一字の字義があるもの。
 - 3 広辞苑に音読の後に「する（ずる）」を加えてサ行変格活用 of 動詞としているもの。
 - 4 広辞苑に訓読、字義ともに無く熟語のみあるもの。
- 上記に従い以下に挙例する（壺は一、式は二の異体字とみなした）。

1

垂	つーぐ	以	もっーて
医	くすし（病をなおす人）	依	よーる
威	おどーす	為	なーす ため

遺 のこーす
閑 けみーする
宴 うたげ
英 はなぶさ
翁 おきな
乙 きのと

可 べーし
苛 さいなーむ
禍 わざわい
画 えがーく
餓 うーえる
階 きざはし
概 おおむね
核 さね
較 くらーべる
活 いーかす いーきる
轄 くさび
官 つかさ
喚 よーぶ
棺 ひつぎ
寛 くつろーぐ
憾 うらーむ
環 たまき
観 みーる
玩 もてあそーぶ
希 まれ

咽 のど
怨 うらーむ
媛 ひめ
往 ゆーく
憶 おもーう

佳 よーい
科 しな
寡 すくなーい やもめ
雅 みやび
界 さかい
害 そこなーう
拡 ひろーげる
郭 くるわ
括 くくーる
褐 かち
缶 ほとぎ
勘 かんがーえる
敢 あーえて
閑 ひま
漠 から あや
還 かえーる かえーす
簡 ふだ
韓 から
頑 かたくな
規 ぶんまわし

揮	ふるーう	棄	すーてる
毀	こぼーつ	宜	よろーしい
擬	なぞらーえる	客	まろうど
旧	ふるーい	却	かえっーて
糾	あざなーう	給	たまーう
虚	むなーしい	距	けづめ
況	いわーんや	局	つぼね
巾	はば	均	ひとーしい
菌	きのこ	銀	しろがね
具	そなーわる	遇	あーう
屈	かがーむ	窟	いわや
訓	おしえ	薰	かおーる
軍	いくさ	郡	こおり
径	みち	溪	たに
憬	あこがーれる	稽	かんがーえる
劇	はげーしい	件	くだん
県	あがた	謙	へりくだーる
顕	あえあわーす	舷	ふなばた
孤	みなしご	弧	つる
庫	くら	午	うま
呉	くれ	護	まもーる
工	たくみ	孔	あな
功	いさお	甲	きのえ よろい
后	きさき	抗	あらがーう
拘	かかわーる	肯	がえんーずる
皇	すべらぎ すめら すべら	衡	くびき
項	うなじ	鉉	あらがね

購 あがな－う
克 か－つ
獄 ひとや

傲 おご－る
酷 ひど－い

沙 すな
挫 くじ－く
財 たから
策 むち
士 さむらい
司 つかさ
視 み－る
誌 しる－す
疾 はや－い
質 ただ－す
邪 よこしま
珠 たま
囚 とら－われ とら－われる
羞 は－じる
淑 しと－やか
准 なぞら－える
準 みずもり
諸 もろもろ
序 つい－で
称 たた－える
掌 たなごころ
証 あかし
奨 すす－める

詐 いつわ－る
歳 とし
柵 しがらみ
暫 しばらく
史 ふひと
恣 ほしいまま
詞 ことば
児 こ
嫉 そね－み
赦 ゆる－す
朱 あけ
樹 き
宗 むね
酬 むく－いる
術 すべ
順 したが－う
処 ところ
如 ごと－し
尚 なお
渉 わた－る
粧 めか－し
象 かたど－る ゴウ（動物）
衝 つ－く

浄	きよーめる	剩	あまつさーえ
臣	おみ	審	つまびーらか
須	すべからーく	睡	ねむーる
随	したがーう	枢	とほそ
崇	たたーる あがーめる	是	これ
姓	かばね	性	さが
斉	ひとーしい	凄	すごーい
聖	ひじり	醒	さーめる
斥	しりぞーける	席	むしろ
脊	せ せい	績	うーむ
宣	のたまーう	踐	ふーむ
遷	うつーる	然	しかーし
漸	ようやーく	膳	かしわで
措	おーく	曾	かつーて
想	おもーう	総	すべーて
槽	ふね	即	すなわーち
則	すなわーち のっとーる のり	族	やから
遜	へりくだーる		
墮	おーちる	惰	おこたーる
馱	においうま	対	むかーう
堆	うずたかーい	態	ざま
戴	いただーく	台	うてな
扱	えらーぶ	託	かこつーける
諾	うべなーう	丹	に（赤土、あか）
单	ひとえ	胆	きも
地	つち	痴	しーれる

逐 おーう
丁 ひのと
腸 わた はらわた
渉 はかどーる
椎 しい
邸 やしき
適 かなーう
徹 とおーす
点 ともーす
徒 いたずら
奴 やつ
陶 すえ（焼き物）
匿 かくーす
凸 でこ

肉 しし
寧 むしーろ
捻 ねじーる

婆 ばば
媒 なかだち なこうど
伐 きーる
畔 あぜ
斑 まだら
繁 しげーる
碑 いしぶみ
微 かすーか

貯 たくわーえ たくわーえる
帳 とばり
勅 みことのり
陳 のーべる
墜 おーちる
停 とーめる
鉄 くろがね
典 のり
電 いなずま
途 みち
到 いたーる
銅 あかがね
篤 あつーい
屯 たむろ

尿 ゆばり いばり
念 おもーう
能 よーく あたーう

輩 ともがら
発 たーつ 発する
阪 さか
販 ひさーぐ
範 のり
番 つがい
罷 やーめる
標 しるべ

賓 まろうど

扶 たすーける

婦 よめ

膚 はだ

副 そーえる

丙 ひのえ

陞 きざはし

蔽 おおーう

弁 わきまーえる

邦 くに

肪 あぶら

貌 かお

睦 むつまじーい

凡 およーそ

摩 すーる

万 よろず

未 いまーだ ひつじ

妙 たえ

妄 みだーり

猛 たけーる

約 つづーめる

唯 ただ

猶 なお

予 あらかじーめ

瓶 かめ

附 つーく

普 あまねーし あまねーく

部 とも

復 また

兵 つわもの

幣 ぬさ たから まい

遍 あまねーく あまねーし

勉 つとーめる

法 のり

某 なにがし

朴 ほお

奔 はしーる

毎 ごと

漫 そぞーろ

密 ひそーか

盟 ちかーう

盲 めくら

喩 たとーえる

幽 かすーか

融 とーける

容 いーれる

理	ことわり	虜	とりこ
慮	おもんばかり	獵	かーる
札	いや	齡	よわい
略	ほぼ	歴	へーる
列	つらーなる	烈	はげーしい
廉	かど	賂	まいない
勞	ねぎらう	浪	なみ
廊	くるわ		

2

胃	内臓の一
尉	中国の官名、旧軍隊・自衛隊の階級一
彙	たぐい、等
意	心、心の動き、考え、わけ、等
維	つなぐこと、つな、等
域	さかい、境界、範囲、等
姻	夫婦となること、縁組
員	まるいこと、特に定められた人や物の数、等
院	貴人の別荘など垣をめぐらした一かまえの大きな家、公共的な建物、 等
韻	音のひびき、おもむきのあること、等
宇	四方のはて、ひさし、等
衛	守りふせぐこと、等
疫	流行病
液	流動する物質、水分、しる
駅	列車・電車を停止し旅客・貨物などの取り扱いのために常用される 場所、等

悦 喜ぶこと、嬉しがること、機嫌のよいこと

援 ひっぱること、たすけること

王 君主の称号、おおきみ、等

凹 物の表面が部分的にくぼんでいること、くぼみ

央 なかば、まんなか、つきること

欧 吐くこと、欧羅巴の略

億 数の名、非常に多くの数

臆 胸、胸のうち、気おくれるすること、等

恩 めぐみ、いつくしみ

絵 物の形象を線や色で平面にえがきあらわしたもの、絵画、映像

菓 木の実、菓子

貨 しなもの、おかね

箇 物を一つ一つさし示す語、等

拐 かたること、かどわかすこと

械 器具、しかけ、からくり、かせ

楷 書体の一、ウルシ科の落葉高木

諧 やわらぐこと、おどけること、等

劾 罪状を取り調べること、さばくこと

涯 水ぎわ、岸、はて、等

該 かねること、あてはまること、等

骸 死人の骨、しかばね、ほねぐみ

格 のり、きまり、法則、身分、等級、等

閣 たかどの、立派な御殿、内閣の略

嚇 はげしく叱ること、おどすこと

穫 穀物を刈りとること、とりいれ

喝 大声を出すこと、大声で叱ること

完 足りないところがないこと、事をすべて終えること
看 よく見ること、見守ること
款 まごころ、法律文などの条項、歳入歳出の予算または決算上の区分
の一、等
監 見張ること、とりしめること、ろうや、等
艦 いくさぶね
伎 わざ、うでまえ、俳優、芸人
気 天地間を満たし、宇宙を構成する基本と考えられるもの、風雨・寒
暑などの自然現象、心の動き、等
岐 わかれること、わかれみち
汽 ゆげ、蒸気
奇 普通と異なること、思いがけないこと、等
季 すえ、おわり、陰暦で四季の末の月、1 定の期間、等
紀 すじみちをたてて記したもの、すじみち、とし、等
軌 車の輪の通ったあと、車の通るべき道、道筋、法則
棋 将棋・双六のこま、将棋、囲碁
畿 帝都に近い帝王直轄の地域
騎 馬に乗ること、馬に乗った人
義 道理、条理、意味、わけ、等
儀 進退動作の上で手本とすべきもの、等
犧 天地・宗廟を祭る際、祭壇に供えた生きた動物
菊 キク科キク属の多年草
吉 よいこと、めでたいこと
級 上下の地位・程度のいちづけ、等
巨 大きいこと、偉大なこと、多いこと
漁 魚をとること、いさなとり、さがしあさること
凶 わるいこと、縁起・運のわるいこと、等

京	皇居のある土地、みやこ、とう
享	身にうけること
協	力をあわせること、かなうこと、等
峡	山・陸地などに挟まれた、せまく細長いところ
郷	むら、さと、等
斤	おの、重量の単位
緊	きつくしめること、等
区	しきること、わけること、等
句	文章中の一区切り、語のまとまり、等
惧	おそれること
偶	ならぶこと、思いがけないこと、等
系	いとすじ、組織だった分類、等
啓	ひらくこと、申しあげること、等
景	けしき、ふぜい、おもむき、等
警	いましめること、守ること、等
芸	草木を植えること、修練によって得た技能、学問、わざ、等
傑	すぐれていること、ぬきんでていること、すぐれた人物
券	荘園・田地などの所有を証明する手形、割符、切手、切符
儉	費用を節約すること、つつましいこと
圏	ぐるりにかこいをしたところ、限られた区域、範囲
権	はかりのおもり、はかり、支配する力、等
憲	基本の法則、おきて、のり、等
験	しるし、きざし、調べること、こころみ、等
玄	黒色、等
個	ひとつの物、ひとりの人、ものを数える語
娛	たのしむこと、たのしいこと
碁	囲碁

坑 地に掘った穴、穴に埋めること
孝 よく父母に仕えること、父母を大切にすること
侯 封建時代の地域支配者、大小名、等
恒 常に変わらないこと、久しいこと
洪 おおみず、大きいこと、等
郊 都の外、町はずれ
校 教育の場、まなびや、比べ調べること、等
航 舟で水を渡ること、飛行機で空を飛ぶこと
康 やすらかなこと、すこやかなこと
酵 こうじかび、こうじかびの澱粉分解作用
稿 詩文を作るしたがき
剛 つよくかたいこと、たけきこと
豪 力・才知にすぐれていること、勢いが強く盛んなこと、等
拷 打ちたたくこと、罪を白状させるために責めること
穀 田畑で作り、実を主食とする植物の類、米・麦・豆など
昆 兄、あとつぎ、なかま
婚 夫婦になること、縁組
紺 青と紫との和合した色
墾 荒地を開き耕すこと

佐 たすけること、等
査 しらべること、明らかにすること
才 生まれつきの資質・能力、等
采 とること、えらぶこと、いろどり、かたち、等
宰 とりしきること、つかさ、等
栽 植えること、草木を植えたところ
斎 神仏をまつるとき、身体を清くたもつこと、等

- 債 かり、借金、貸金をとりたてること、等
- 材 建築などに用いる木、用いて役に立つべきもの、等
- 剤 各種の薬を調合すること
- 昨 過ぎ去った日、きのう、以前、等
- 索 大なわ、ばらばらになるさま、さがし求めること
- 錯 まじること、入れちがってまちがえること
- 冊 かきつけ、等
- 刹 てら、梵語の音訳字
- 雑 種々のものの入りまじること、有用ではないもの、あらくて念入りでないこと、等
- 棧 かけはし、戸・障子の骨、等
- 賛 たすけること、ほめたたえること、等
- 祉 神の授ける福、めぐみ、さいわい
- 肢 身体のわかれた部分、わかれでたもの
- 師 学問・技芸を教授する人、先生、宗教上の指導者、等
- 嗣 つぐこと、あとつぎ、よつぎ
- 詩 中国の韻文の1体、文学の一部門、等
- 滋 草木がしげること、うるおうこと、栄養になること
- 磁 鉄を吸引する鉱物、その両極の引きあう力、焼きもの
- 璽 天子の印章、三種の神器の一
- 式 一定の体裁または形状、標準となるやり方・作法、形にのっとった行事、等
- 軸 車の心木、巻く物の中心にする丸い棒、等
- 識 見分け知ること、考え、意見、等
- 舎 仮にやどる場所、住居などに使用する建物、等
- 尺 尺貫法における長さの単位、ながさ、等
- 釈 文意を解きあかすこと、説明すること、等

爵 中国古代の青銅器の一、等
需 もとめること、必要であること
儒 学者、孔子の学問、やわらかいこと
週 めぐること、日・月・火・水・木・金・土の7曜日を1期とした称
肅 おそれつつしむこと、うやうやしくすること、等
銃 個人で携帯できる火器、鉄砲
叔 父母の弟妹、おじ、おば、等
塾 門の側の堂宇、子弟を教授する私設の学舎、等
俊 才知のすぐれたこと
旬 古代朝廷で行われた年中行事の一、魚介・蔬菜・果物などがよくと
れて味の最もよい時
殉 死者のあとを追って死ぬこと、あることにつくして命を投げだすこ
と
純 まじりけのない生糸の意、他の物が少しもまじらないこと、等
循 法やしきたりにしたがうこと、めぐること、等
遵 規則にしたがうこと、守ること
庶 もろもろ、いろいろ、一般、めかけばら、願うこと
抄 かすめること、かき写すこと、等
肖 にていること、にせること
昭 てりかがやくこと、あきらかにすること
症 病気の性質、病気
祥 めでたいこと、等
章 あきらかにすること、しるし、等
紹 とりもつこと、ひきあわせること、等
晶 きらめくこと、等
硝 鉱物の一
彰 あらわすこと、あきらかにすること

- 礁 水面にみえがくれする岩
- 冗 むだなこと、余計なこと、わずらわしいこと、等
- 条 えだ、細長いすじ、等
- 状 すがた、ありさま、ようす、等
- 壤 耕作できる肥えた土地、大地
- 嬢 母親、未婚の女子、等
- 錠 扉などに取り付けてしまりとする金具、粒状の薬
- 職 担当の務め、生計のための仕事、等
- 芯 (心と同じとして) 物のまん中、等
- 娠 みごもること、はらむこと
- 紳 古く中国で、礼服用の際に腰で結び、その余りを垂らして飾りとした幅の広い帯
- 仁 いつくしみ、おもいやり、等
- 迅 はやいこと、すみやかなこと、はげしいこと
- 陣 兵士を並べ隊伍を整えること、いくさ、等
- 腎 腎臓に同じ、大切なところ
- 帥 軍の主将、将軍
- 髓 骨の中の腔所を充たす結合組織で、黄色の柔軟物、中心、等
- 牲 神に供える生きた動物、いけにえ
- 精 米をついて白くすること、こまかいこと、まじりけのないもの、等
- 税 国費・公費支弁のため、国家・地方公共団体の権力によって国民から強制的に徴収する金銭など
- 析 おので木を割ること、分けること、とくこと
- 隻 組み合わせる相手がないこと、等
- 戚 おの、したしいこと、身内、等
- 籍 文書、書物、人名簿
- 窃 ひそかに取ってわがものにすること、ぬすむこと

摂 とること、代って行うこと、等
仙 仙人に同じ、才芸のまさりすぐれたひと
栓 物の穴に差し込んでその物が動かないようにする物、管や容器など
の口をふさぎ中のものが漏れ出ないようにするもの
旋 まわること、もどること、等
腺 動物の上皮から分化し、それぞれに特有の物質を分泌する器官、等⁸⁾
箋 目印やメモのための紙、等
線 細く延びたもの、等
織 細いこと、こまかいこと、等
禪 天子が位をゆずること、等
祖 親の前の代、家系の初代、等
租 年貢、税金、等
塑 土をこねて物の形を作ること
壮 血気盛んな時、等
荘 いかめしくおごそかなさま、等
曹 裁判をつかさどる役人、等
僧 仏教の修行者の集団、その修行者
層 かさなること、等
踪 足あと、ゆくえ
燥 かわくこと、かわかすこと
像 物のかたち、すがた、等
臓 はらわた
俗 一般のならわし、僧でない世間普通の人、世間、等
卒 下級の兵士、にわか、おわること、等

妥 おだやかなこと、おれあうこと
胎 みごもること、等

- 泰 ゆったりやすらかなこと、等
- 逮 およぶこと、追いつくこと
- 隊 共同の行動をとるために組織された集団、等
- 第 ついで、物の順序、等
- 題 頭部のしるしをつける所、ひたい、書物の名、等
- 宅 すみか、自宅、等
- 卓 つくえ、高いこと、すぐれていること
- 拓 土地をひらくこと、石刷り、刷りとること
- 濯 洗い清めること、すすぐこと
- 旦 あさ、あけがた、等
- 誕 いつわること、ほしいままのさま、うまれること
- 団 まるいこと、ひとかたまりになって集まること、等
- 段 わかち、くぎり、等級、てだて、等
- 壇 土を盛り上げて築いた祭場、1段高く設けた場所、等
- 緻 こまかいこと、念入りなこと
- 畜 たくわえること、ためること、やしなうこと
- 秩 ついで、物事の順序、等
- 窒 ふさがること、等
- 茶 ツバキ科の常緑低木、茶のわかばを採取して製した飲料、等
- 嫡 本妻、あとつぎ、等
- 宙 無限の時間、そら、等
- 忠 いつわりのない心、まごころ、等
- 抽 引き出すこと、抜き出すこと
- 衷 なかをとること、かたよらないこと、まごころ
- 酎 焼酎の略
- 駐 車馬をとめること、とどまること、滞在すること
- 庁 官務を取り扱う所、等

朕 天子の自称
賃 使用料、報酬、代金
廷 政治を行う所、裁判を行う所
抵 おしのけること、ふれること、等
亭 宿場、あずまや、等
貞 正しくさだまること、等
帝 みかど、天子、天上の神
遞 つぎつぎに伝え送ること、順を追ってすること
偵 さぐること、うかがうこと
艇 こぶね、はしけ
迭 いれかわること
哲 道理に明るいこと、等
填 すきまをうめること、ふさぐこと
斗 容量の単位、ます、等
党 なかま、ともがら、等
塔 高くそびえ立つ建造物、等
痘 ほうそう、水疱、もがさ
糖 あめ、サトウキビなどから製する甘味料、等
膳 原本どおりに書き写すこと
堂 賓客に接し、また、礼楽を行う建物、神仏を祭る建物、等
騰 高くはねあがること、物価があがること
胴 動物体の頭・頸・四肢・尾以外のの部分、等
特 ことにぬきんでること、他と別であること、とりわけ
徳 道をさとした立派な行為、等
毒 生命または健康を害するもの、等
頓 ぬかずくこと、とどまること、おちつけること、等

- 那 なんぞ、どれ、等
- 妊 みごもること
- 脳 中枢神経系の主要部、等
- 農 田畑を耕して作物をつくること
- 把 にぎること、等
- 覇 諸侯の長、等
- 肺 両生類以上の陸生動物の呼吸器官、等
- 俳 芸をする人、等
- 陪 共をすること、つきそうこと、家来の家来
- 賠 他に与えた損害をつぐなうこと
- 伯 兄弟中の年長者、等
- 拍 手のひらを打ち合わせること、等
- 舶 大型のふね
- 博 あまねくゆきわたること、等
- 漠 広い砂原、等
- 爆 はじけること、等
- 鉢 僧尼が日常所持する食器、皿よりは深くすぼみ、碗よりは浅く開き、
食物・水などを 入れる容器、等
- 汜 水がひろがること、あふれること、等
- 汎 ひろくゆきわたるさま
- 判 見分けること、さばき、等
- 版 文字を書くいた、等
- 班 わけること、順序、組み分け
- 般 めぐること、同等の事柄
- 搬 物をはこぶこと
- 頒 わかち与えること

藩 かき、かこい、江戸時代の大名の領地、等
晩 ゆうべ、ひぐれ、時期がおそいこと
蛮 四夷の一、南方のえびす、粗野であらあらしいさま
盤 食物を盛る器、おおざら、等
妃 天皇に仕える女性で皇后に次ぐ位にあるもの、きさき、皇族の妻の
称
批 くらべ、品定めをすること、等
披 ひらくこと、ひろげ示すこと
非 よくないこと、うまくゆかないこと、等
泌 液体がしみ出ること
百 数の名、10の10倍、もも、多くのもの
票 ふだ、書付け、選挙・採決などで意思をを表示したふだ
秒 稲の穂先の毛、時間に関する単位、等
頻 しきりにすること、くり返し起ること
敏 頭のはたらきや動作のすばやいこと、さといこと
不 打消・否定の意
府 くら、役人が事務を執る所、等
訃 人の死を知らせること、死亡のの通知
符 わりふ、あいふだ、等
譜 物事を系統・順序をたてて記し、または類従したもの、等
武 雄々しいこと、戦いの力、等
福 さいわい、しあわせ、幸運、等
複 かさなること、ふたたびすること、等
雰 周囲に立ちこめる大気
墳 土を盛りあげた墓
塀 家や敷地などの境界とするかこい
弊 ついえること、つかれること、よくないこと、等

璧 中央に孔のある円盤状に作った玉やガラスの製品、すぐれたもの
 哺 食物を口にふくむこと、はぐくみやしなうこと
 舗 みせ、しきならべること、等
 簿 帳面
 胞 胎児を包む膜、母の胎内、等
 俸 職務に対して与えられるもの
 砲 火薬で弾丸を発する筒型の武器
 坊 区画されたまち、僧侶の住居、僧侶、等
 剖 二つに切りさくこと、是非を分けること
 帽 頭にかぶるもの
 棒 手に持てるほどの細長い木・竹・金属などの称、等
 貿 金銭を介して財貨を交換すること
 撲 なぐること、うちたたくこと
 勃 勢いよく起ること、等
 盆 ひらたい瓦器、木・金属などで作った、浅く平たい、物を載せる道具、等

魔 仏道修行や人の善事の妨害をなすもの、等
 枚 紙・板・皿など薄く平たいもの、またそれを数える語、等
 味 よあけがた、はっきりしないこと、等
 幕 広く長く縫い合わせて、物の隔て、または装飾として用いる布、等
 膜 生物体内の器官を包み、隔てる薄い層、物の表面を覆う薄い物
 抹 なでこすること、ぬりけすこと、粉にすること
 冥 くらいこと、等
 蜜 みつばちが花から集めてつくる甘い粘液、甘いこと
 脈 生物の体液が流れるすじ、等
 銘 金属にしるすこと、心にきざんで忘れないこと、等

耗 へること、へってなくなること
麵 小麦粉、粉を練ったものを細長く切った食品
紋 織物の地に織り出された模様、等

冶 金属を精錬すること、等
厄 くるしみ、わざわい、等
役 官から人民に課する労働、つとめ、専一の務め、等
愉 たのしいこと、よろこばしいこと
悠 遠いこと、はるかなこと、ゆとりのあるさま
郵 宿駅、宿場、官営で文書・物品を運送する制度
裕 ゆとりがあること、豊かなこと
洋 広い海、等
庸 任用すること、平凡なこと、かたよらないこと、等
曜 かがやくこと、ひかり、日・月と火・水・木・金・土の五星の称、
曜日
沃 こえていること、等
翌 年月日など時に関する名詞に冠して、次に来る意を表す語

羅 あみ、うすぎぬ、つらなること、等
酪 牛・山羊などの乳汁を精練した飲料、等
辣 からいこと、きびしいこと、むごいこと
覧 見ること、概観できるようにまとめた文書
欄 てすり、文書で、罫で囲んだ部分
吏 役人
痢 はらくだり
陸 地表の水におおわれてない部分、等
慄 おそれおののくこと

- 隆 もり上がること、高くすること、さかんなこと
 硫 非金属元素の一、いおう
 両 相対して一組となるものの双方、ふたつ、等
 料 物をはかること、使用するためのもの、代金
 僚 仲間、ともだち、役人
 寮 役人の住む所、学校・寺院・会社などの寄宿舍、しもやしき
 療 いやすこと、病気をなおすこと
 瞭 ひとみの明らかなこと、物事のはっきりわかること
 厘 貨幣の単位、尺度の単位、目方のたんい ＊リン（慣用音、呉漢音
 リ）
 倫 人として守るべきみち、仲間
 累 かさねること、しだいに、わずらい
 壘 とりで、等
 零 雨のしずく、きわめて小さいこと、はした、ゼロ
 錬 金属をねりきたえること、薬をねること、ねりきたえること
 炉 床の一部を切りあけて箱形にして火を貯え、暖を取り、また、物を
 煮炊きする装置
 郎 男、家来、等
 楼 高く構えた2階建ての建物、やぐら、等
 湾 海水や湖水が陸地に大きく入り込んだところ、入江、弓なりにまが
 ること

3

愛	圧	案	逸	鬱	益	謁	演			
課	賀	介	慨	刊	感	歛	期	議	刑	喫
禁	吟	慶	検	献	講	号				

察	算	資	殉	署	叙	訟	賞	囑	信	制
征	征	詮	属	賊	存					
達	談	徵	呈	訂	撤	督				
派	排	倍	罰	評	賦	封	服	没		
慢	魅	模								
輸	擁									
濫	律	了	領	令	隸	録	論			

4

曖（曖昧） 挨（挨拶） 椅（椅子） 旺（旺盛） 鋼（禁鋼）
 梗（梗塞） 摯（真摯） 拶（挨拶） 汰（淘汰） 奈（奈落）
 阜（岐阜） 瘍（潰瘍）

拉（拉致） * 本来呉音漢音ともロウ、慣用音ラツ、常用漢字表ではラ、
 広辞苑には「ラ」読では拉丁（ラテン）の略、とある

璃（瑠璃） * 常用漢字表では浄瑠璃） 侶（伴侶） 瑠（瑠璃） * 常
 用漢字表では浄瑠璃）

呂（風呂） * 漢音リョ、呉音ロ、広辞苑「リョ」読で「低い音域」の意）

おわりに

先ず、上記の例を概括する。

1 グループは、訓読であるので当然意味が分かりやすい（客・まろうど、
 のように却って分かりにくいものもあるが）。

広辞苑の訓読が一定の基準とみなされれば、その訓読を常用漢字表に掲
 載しても問題はないのではないだろうか。

2 グループの胃、駅、王、絵、菊、軸、銃、塾、芯、税、塔、毒、肺、班、
 票、幕などは音読をそのまま名詞として使用されるので意味は分かりやす

い。多くは例欄に熟語が掲載されているので、その字義がおおよそ推測できる（意見・意味・決意の意、才能・才覚・秀才の才、騰貴・暴騰・沸騰の騰など）。熟語の例が一つでその字義が分かりにくいもの（語彙の彙、弾効の効、紹介の紹、肥沃の沃など）は備考欄に字義を載せるべきであろう。「朕」に至っては音読の「チン」のみが掲載されている。これも備考欄にその字義が必要であろう。

3 グループは、サ行変格活用動詞として使用されているので、訓読に準じて意味が分かりやすい。

4 グループは、数も少なくほぼ（ ）内の熟語専用漢字となっている。

国語表記に漢字は必要不可欠である。仮名文字だけでは意味が取りづらい。試しに常用漢字表の前書きの1を以下のように平仮名だけで表記すると、

このひょうは、ほうれい、こうようぶんしょ、しんぶん、ざっし、ほうそうなど、いっぱんのしゃかいせいかつにおいて、げんだいのこくごをかきあらわすばあいのかんじしょうのめやすをしめすものである。

となり、読みにくいこと夥しい。漢字は国語表記において抑揚・リズムを持たせ句読点の役割をも担っている。

また、所謂同音異義の熟語は非常に多い。例えば、「コウカ」と読む熟語には、広辞苑では工科、公家、公暇、公課、功科、功過、功課、甲科、弘化、光華、考課、劫火、効果、後架、皇化、皇家、紅花、紅霞、香火、校歌、耕稼、航河、降下、降嫁、高価、高架、高厦、高歌、黄花、黄禍、硬化、硬貨、鉉化、閣下、膠化、鴻化、洪化、闔家とある。和語においても同音異義の言葉がある。「かげ」という言葉は「光」や「物の姿、形」を表すが、正反対の「暗いこと」や「隠れた所」の意味でも使用される。この場合「光」や「姿」を指す場合は「影」（日陰、人影など）の字を使用し、「暗い」や「隠れた」を指す場合は「陰」（日陰など）の字を使用する。漢字によって語彙の意味の判別を行っているのである。

常用漢字の訓読が示されている1,321字は字義が一応は明確である¹⁰⁾。訓読の示されていない815字においても、積極的に訓読・字義を取り入れられないか。漢字を「国語」の一部とするのであれば和語である訓読を更に多く示すべきであろう。

注

- 1) 中国語は形態素として一音節が一語を構成しており、その一音節を文字とした漢字は表語文字である。
- 2) 『字彙』は明の梅膺祚が編纂した字書。214の部首を設け始めて画引きを採用した。『字彙補』は『字彙』に収められていない異体字を補うことを目的として編纂された。
- 3) 反切とは、漢字2字による音標法。前の漢字は声母（＝子音）のみを表し、声母より後の韻母（母音や声調を含む部分）を含まず、後の漢字は韻母のみを表し、この前後の漢字の声母と韻母を組み合わせて表音する。
- 4) 『搜真玉鏡』、書名と思われるが詳しくは不明である。
- 5) 『竜龕』は『龍龕手鑑』のこと。遼代、僧、行均によって編纂された字書。
- 6) 揚雄は前漢の学者。『蜀都賦』は揚雄作の文章。蜀は古の国名。賦は韻文の一。
- 7) 平成22年11月30日に内閣告示第2号「常用漢字表」として内閣告示されたもの。
- 8) 「腺」は国字である。本来国字は「梣」「枋」「峠」など訓読のみであるが、腺は音訓欄に「セン」とあり音読のみである。
- 9) 『広辞苑』第五版 電子辞書版を使用。
- 10) 「虞」は音訓欄に「おそれ」とだけある。例欄、備考欄にも一切記述がない。「不虞（フグ）」や「憂虞」、「虞犯」など熟語としても用いられ、これは音読の「グ」も掲載すべきではないか。